

汎美

汎美術協会 会員便り

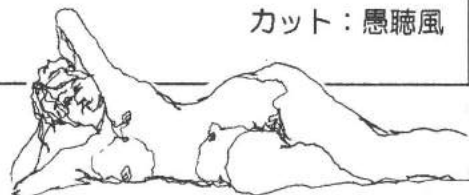
Vol.39

発行: 汎美術協会事務局
2018年 3月

目 次

ご挨拶に替えて	汎美術協会代表	根岸 節	3
研修報告		研修係	
ボストン美術館の至宝展		島田隆一	3
ボストン美術館の至宝展を鑑賞して		相京三千代	4
汎美術協会研修座談会の報告		座長・編纂	
		大辻敏成	5
「SNS」と「Art」と「変化」の話		木虎和生	8
日和佐 廣の人間ドラマ	版画	日和佐 廣	10
	添付詩	茜	
「空」の径		成田雄智	11
デッサンの線		新海 進	12
汎美術協会へ、今日の芸術家たちへ		小泉恵一	13
2017「汎美・秋季展」に想う		保倉一郎	14
燃え上がる情念		佐川毅彦	14
汎美術協会との出会いと抱負		岸 明子	15
「3/4」		根岸 節	16
よんぶんのさん			
生い立ちを想う		保倉一郎	18
「乃木坂に…」		愚 聴風	21
表紙デザイン		三竹康子	1

カット：愚聴風





ご挨拶に替えて

汎美術協会代表

根岸 節

「不易と流行」という言葉があります。時代や状況でフレキシブルに変わるものが流行で、どんなときにも不変な本質のようなものが不易です。汎美の基本とする「何でも受け入れる自由な表現・ピラミッド形でない自由平等」が不易にあたりましょう。私達はこの得がたく揺るぎない「不易」を愛するものです。

先般、私は代表役を賜りましたが、先輩諸氏の努力で築いたこの不易を皆さんと共に愛し、楽しみをもって表現活動に邁進したい所存です。汎美のますますの発展にみんなで頑張ろうではありませんか。

研修報告

汎美術協会研修係

- 研修名 ・ 「ボストン美術館の至宝展」
- 期 日 ・ 8月9日(水) 1:30~3:30
- 場 所 ・ 東京都美術館
- 参加者 ・ 相京 広瀬 田中 小杉 阿部 高木 日和佐 島田

当日は、なぜか昨年の研修同様、激しい雨が断続的に降る荒れ模様の天気だった。その為外には出ず都美館2Fの食堂でアートや健康問題等を話題に小1時間程度でしたが楽しい時間を過ごしました。

ボストン美術館の至宝展

島田 隆一

ボストン美術館の歴史やコレクターの人物像に焦点を当ててかなり詳しく紹介している。当時の新興国アメリカの意気込みや誇りが伝わってくる。

コレクション別に、古代エジプト美術、中国美術、日本美術(近世・江戸期)、フランス美術(近代・印象派)、アメリカ絵画、コンテンポラリー(現代美術)等に分けられている。作品数はそれぞれ10数点程度でそれほど多くない。日本美術とフランス絵画が比較的多かった。それぞれのコレクションの横の繋がり関係なくコレクション別に鑑賞すれば良いのだろう。ただこの時代の場所(地域)も異なる作品群を同一空間で同時に見るという経験によって新しい発見や気付きもあった。

少し誇張した言い方をすれば、言わばシャッフルされた状態で作品と向き合う訳だ。

古代エジプト美術も、以前単独で見たエジプト美術よりも他の作品との比較によるのか今回の方がずっとモダンで洗練された作品のように見えた。紀元前という時代は関係なかった。

以前エジプト美術が評価され見直されたのは、キュビズムが出現してからだという話を聞いたことがある。ギリシャローマルネッサンスと続く流れが西洋美術のメインストリ

ーム（主流）なのだろう。一点透視法で対象を正確に描く方法に比べてエジプト美術のレリーフに見られる人物像は、顔は横向き、上体は正面、下半身は横向きと約束ごとによって形式的に表現されている。多視点というところがキュビズムと共通する。キュビズムの出現を待ってエジプト美術に対する認識も変わったと言えるのだろう。

一番印象に残った作品は英一蝶の「涅槃図」だった。釈迦の死を悼む群衆や鬼や動物等をアニメ風（？）にも見える描法で一人一人緻密に描いている。

悲しい場面なのに人物の表情がリアルかつユーモラスで一つ一つ見ていくだけでも楽しい。今年になって修復が完成したということだが、どう見ても江戸期の作品には見えない。ポストモダンの最近描かれたような新鮮な作品に見えるのだ。

これは我々が、広い意味でポップアート等を介して、写実と言ってもアニメ風な表現に違和感を持たなくなっていることも関係していると思う。

50年前なら、また違って見えたのではないか。時代によって見え方も変わるのだ。

しかし、どこかで見たような既視感がつきまるとして、しばらくいろいろ思いをめぐらしたがその場ではわからなかった。後日ふと思い出した。

2年程前、森美術館で見た村上隆の「五百羅漢図」の人物像の表情がよく似ているのだ。

時系列的に見れば現在活躍している村上の作品を江戸期の英一蝶が真似るわけがない。

村上が英一蝶の「涅槃図」の人物像を参考というかシュミレーション（引用）したのだろう。村上が価値を見出したことによって英一蝶の「涅槃図」に注目することになったとも言えるのではないだろうか。

そう言えばデュシャンの「泉（小便器の作品）」も発表した当時（1917年/今年2017年はちょうど100年目にあたる。）現代美術の始祖の作品ではなくスキャンダラスな噂の方が先行した作家の作品と言うのが一般的な認識だったと思う。

1950年代に入ってネオダダ（ジャスパージョーンズやローシェンバーグ等）やそれに続くポップアートによってデュシャンは再発見され、1960年代後半～70年代にかけてのコンセプションアートに至って「僕らはみんなデュシャンの傘の下」と言う当時よく見かけたフレーズのように不動のものになった。

ポストモダンにその流れが繋がり、今日では現代美術はデュシャン抜きには語れない。

「泉」も伝説の作品になったというわけだ。

人間の歴史同様、過去の営みの意味は未来に起こることによって決まってくるようにアートの過去の作品の価値をきめるのは未来のアートの営みとも言えないだろうか。

「ボストン美術館の至宝展」を鑑賞して

相京 三千代

ボストン美術館は1876年に開館しました。古くはエジプト美術の発掘を1905年にハーバード大学とエジプトが共同で発掘したものが見られるとの事で是非見たいと思っていました。

ツタンカーメン頭部は、以前エジプトを旅したとき、似たものを見ましたが、ボストン美術館が所有するものも格調高いものでした。

又、日本の作品は、フェノロサやビゲローが日本で集めた物で、その中でも英一蝶の「涅槃図」、司馬江漢の「秋景芦雁図」は素晴らしいと思いました。「涅槃図」は伊藤若冲に影響を与えているようにも見られました。

ドガ、ゴッホの作品もボストンに行かないと見られないものなので、世界屈指の作品が今回見られ大変勉強になりました。



汎美術協会研修座談会の報告

2017年12月17日 国立新美術館研修室Aにて

座長・編纂： 愚聴風 大辻敏成

PROLOGUE

この研修は新しい試みであって、会員諸子が少しでも作家・創造者としての意識を高めるようにと企画したものです。考え方は様々でしょう、従って結論を決定づけるものではありません。個人の意識に何らかの動きがおきることを期待します。今回は「作家」とはどのようなものか？について挙げた諸子のご意見です。

THEMA

あなたにとって作家とは？

OPINION

- ・自分の作品が、社会に対して責任を負える立場にあるもの。
- ・自己に対して責任を負えるもの。
- ・最近「アーティスト」とも言われるが、それは「作家」と違うのか。
- ・私は日頃疑問に思うのだが、例えば「お習字」「綴り方」少し広げて「デッサン」のようなもの、つまり習作を作品として発表するケースもあるが、作家としては…。
- ・でも例えば石膏デッサンの場合でも“自分が見せたい像”として作家の手技が加わっているのだから、一概に習作だから…とも言えないかも。
- ・音楽などには「エチュード（練習曲）」と言うのががあるが、それは練習者の為に創られた曲なので、己の習作として創られたものとはまた少し違うのでは…。いわば石膏デッサンならモデル側の石膏像と言うことになるか。
- ・作家としての発表となれば、それは 習作より制作が望ましいとは思いますが…でも必ずしもそうともはね。
- ・中世などでは「画工」という言葉があったが…。

参考：画工＝「絵を描くことを職業とする人」「絵描き職人」

画工司＝絵巧みのつかさ。

- ・そう言えば、中世宗教画の「イコン」は祈りと切り離せない。イコンは多く祈りを唱えながら描いた。それに比べると今の作家と言われる人達はどうか。
- ・中世までは芸術・宗教・科学が分離していなかったからかな。

- ・世紀末は科学が進んで、分光理論から印象派が生まれたとも。
- ・印象派ですら科学の理論に触発されて。
- ・作家の概念は、時代の変遷・進化と関わっている。
- ・何かを造っている人が作家、心に響くものを。それが喩え子供であっても。
- ・作家というと「何となく作家という大きな概念」に包括されているが、ともかく好きなものを創りさえしていれば作家。
- ・作家とはそんな大仰に考えることでなく、単なる世間的な呼称。
- ・汎美の規約では全て「作家」であることを前提にしている。従って出品者であれば全て作家である。
- ・作家とは個人の意識の問題だろう。己が作家と思えばそれが作家だ。
- ・作家は少なくとも創造者でなければ…。
- ・「コピ・ペ」(コピー&ペースト)では作家の片隅にも置けない。一作一作が博士論文であらねば作家とは言えないだろう。コピーは創造のアントニム。所詮無理な話だが、本人の過去作品の一部のみのコピーですら嫌がる人もいる。

INTERVAL

ではここで「作家と創造」について考えてみましょう。

「作家」とは意外に新しい言葉で、近世までは「作者」又は「戯作者」と言われていました。その意味には“戯作を業にする人”“江戸後期の通俗小説家”のことで、明治期になってからそれらと区別するために「作家」と言われるジャンルが出来ました。そして作者も作家も創造することが必要条件でしょう。

「創造」についても調べてみました。

創造=①新しいものを自分の考えや技術などで初めて創り出すこと。

②神が万物を創り給うこと。

座長独り言

作家は創造者であることは勿論だが、それなら発表まではたどり着きたいものだが…でも必ずしも発表せずとも創造者はありうるんだなあ。

INTERVAL

ベルクソン(仏、20世紀前半の哲学者)はこんなことを述べています。

「真の實在は純粹持続であり、持続力が弛緩すればたちまち生命は物質化してしまう。持続するという緊張感は生命の飛躍を促し、創造的進化をもたらして、それは直観で捉えられる」と。

OPINION

- ・私は神である…と繰り返して述べた芸術家(世紀末の天才的バレエダンサー)がいたが、私は賛成だ。作家ならその位の気迫がなければ。
- ・社会の認める作家と、自分が自分自身をそう認めた作家があろう。
- ・各自の内面性に絡むもので、おのれの内面の問題だからご自由に…。
- ・新たな世界を立ち上げると自負し、現に行動を興している=興そうと考えているのはダメ=のが真の作家だ。

・それに“社会に対して汎美としての責任を負う”を付け加えたらどうだろう。

座長独り言

「社会に対して責任を持つ云々」という考えについては、考え方の別れるところかな、社会を意識して“受け”を狙うのは如何な物か。「曲学阿世」という言葉が示すとおり、世に阿^{おもね}て己を失うのはネエ、みんなが喜ぶことに参加し社会に貢献することも立派なことだけど、ここらが芸能と芸術の別れ目かな…。私としては例え反社会的であっても受け入れられる許容社会であってネ。過去のヨーロッパでは、アンティ・クリスト、反神論、「神は死んだ」「それでも地球は回る」と芸術や科学界でも、当時は宗教社会だったので大変なエネルギーだったなあ。

座長まとめ

いろいろお考えを戴きましたが、終盤に大変佳い作家観をいただいたようです。つまり作家とは、

「新たな世界を立ち上げようと自負し、現に行動を興しつつ自分自身に対し、また社会に対し責任を負うことが出来る作品の発表者」と言う解釈。

しかしながら、以上の「社会に対して責任を負う」は創作の桎梏になる…という語弊もあるやもしれませんが、当初に申したとおりの座談は結論を出す物ではないので、皆さんの心に動くものが起こり、創作クオリティー、ご精進の参考になれば僥倖です。

ありがとうございました。

エピローグ

私達人間は動物であって、植物や植物人間でもありません。動物は字の通り「うごくもの」ですから行動のないところに創造はあり得ないし、「動」が生命です。「動」を持続するその緊張感が生命の飛躍を生み、それが**創造的進化**となる…そしてその実践者が「作家」と言えるのではありませんか。いささか親近感も持ちますが、私達せいぜい「動」を持続したいものですね。では再びベルクソンの「創造的進化」論をもって「私の作家論」のシメといたします。

創造的進化

アンリ・ベルクソン (1859-1941 フランス)

物事の概念的把握よりも**直感的把握**が重要であることに注目し、生の哲学を唱えた。

「生物というものは物質の機械論的な機構によって進化するものではなく、生命の根源的な衝動に於ける“生命の弾み”によって内側から進化して行き、そこに新しい発展としての創造がある」

座談会出席者：阿部、いなづみ、岩田、大谷、大辻、大野、木虎、久保、小杉、島田、中西、中村、成田、根岸、馬場、日和佐、保倉、三竹。

皆様のご意見を読みやすくするために、座長がある程度加筆・編纂しました。あしからずご了承願います。(2017.12.20. 第1稿 12.22 第2稿)

「SNS」と「Art」と「変化」の話

木 虎 和 生

『SNS』がプライベートだけではなく企業・学校での連絡網や広報の手段として広まり、もはや社会インフラとさえ言われる。SNSについて少し説明すると、“SNS＝ソーシャル ネットワーキング サービス”と呼ばれるインターネット上のコミュニティ型の会員制サービスのことで、例としてfacebook、Instagram、Twitter、LINE等があげられる。それぞれに特徴があるのだが、その内容を要約すれば、発信者が写真や文章（個人的出来事・話題であったり、様々な告知や活動のアピールであったり、...）を掲載し、多数のユーザーがそれらについてコメントしたり、シェアすることで情報が拡散される。またダイレクトのメッセージ機能は相手を読んだかがわかるため、通常のEメールよりも便利というわけだ。何よりサービス自体の費用が無料であるから、誰でも気軽に始めることが出来るし、パソコン・スマホの普及とともに、口コミ媒体・広報宣伝手段としての利用価値は増すばかりである。

汎美でもこれを広報等に活用しようと、公式のFacebookとTwitterを運営している。ただ残念ながら、会員向けに立ち上げたFacebookの非公開グループのメンバーは現在13名にとどまっており、機会を捉えて説明と勧誘を試みているのだが、有効に使えているとは言い難い。汎美でEメールアドレスをお持ちの会員は30名以上おられるので、少なくともその30名くらいが始めて、より多くの会員が利用するようになれば、時間の限られた運営委員会の場合だけではなく会員相互のコミュニケーションの活性化に有効だろうと思われるのだが、まだSNSに対する理解不足や心理的抵抗があるのだろうか？。汎美内で広まらない理由として、SNSに対するマイナスイメージ --- 時折耳にする炎上等のニュースや、不特定多数の見知らぬ相手とつながるような得体の知れなさ --- を感じているのかもしれないと想像する。実際はパソコンやスマホの操作ができ、日常生活同様にプライバシーや人を傷つけない言動に注意すればさほどの心配はないのだが、...

SNSに限らずインターネットを含むIT（情報技術）の普及と処理能力の高速化に伴う進歩は、“第四次産業革命＝インダストリー 4.0”とも言われ、製造業のみならずどの分野でもさらなる広がりを見せている。一般論として、こうした様々な時代変化に対応できるか否かは、その組織・領域の盛衰に関わるのだが、汎美を含む『Art』領域の状況はどうだろうか？

私見では、昨今話題となるような展覧会をみると、ITの活用が当たり前になっているようだ。例えば展覧会の公式サイトに加えてSNSで告知したり、観覧者に自由に画像や感想を拡散してもらったり、アプリを使った無料の解説が聴けたり、AR（拡張現実）で疑似体験が出来たり、...。こうした技術的対応だけの結果ではなかろうが、かつて経済合理性が問われ「美術自体がマイナーだ」「美術展は娯楽としてコスパが悪い」と言われた『Art』は、今、人気の展覧会に大行列ができ、地域アートのイベントが乱立と言っているほど盛んに開催されている。経済状況に左右される面が有るにせよ、大きくは『Art』一般のこうした試みが、娯楽としても広く受け入れられ、『Art』領域の発展に寄与している証左ではないかと思う。

少し作品の傾向について観てみると、手法やモチーフにAI（人工知能）やバイオテクノロジー等の研究を取り入れて表現したものや、現代社会が抱える諸課題 --- 政治・民族・宗教・アイデンティティ等をテーマにしたもの、あるいは私的表現の追求がある種の現代性を帯びていたり、同時に美術史的引用や実験を試みている等々、...、作品としての重層的解釈を可能とする『Art』が、今の時代に求められている（市場性が有る）という事らしい。

では、我が汎美や「公募団体展」の場合はどうだろうか？。。これも私見では、団体の規模にかかわらず出品者・観覧者の固定ファンは一定数いるようだが、若い世代が減少しているという話は耳にするし、先ほど触れた『Art』同様に色々と工夫してはいるが、いささか時代遅れな感じは否めない。。何故だろうか？

第一には、そこに並ぶ作品そのものの問題（クオリティの低さ、技術の陳腐化、テーマ性の欠如等）があるのではないかと自戒をこめて思う。第二には美術館での「公募団体展」という展覧会形式そのものが、様々な娯楽や『Art』の出現によって、今の時代にマッチしていないのではないかと仮に作品個々に魅力があるとしてもそれを伝えきれていないのではないかと。との疑問も生じ、さらには日本特有の「公募団体展」は、明治期以来一定の役割を果たしてきたが、時代とともに既にその役割を終えたのではないだろうか？とさえ思う。

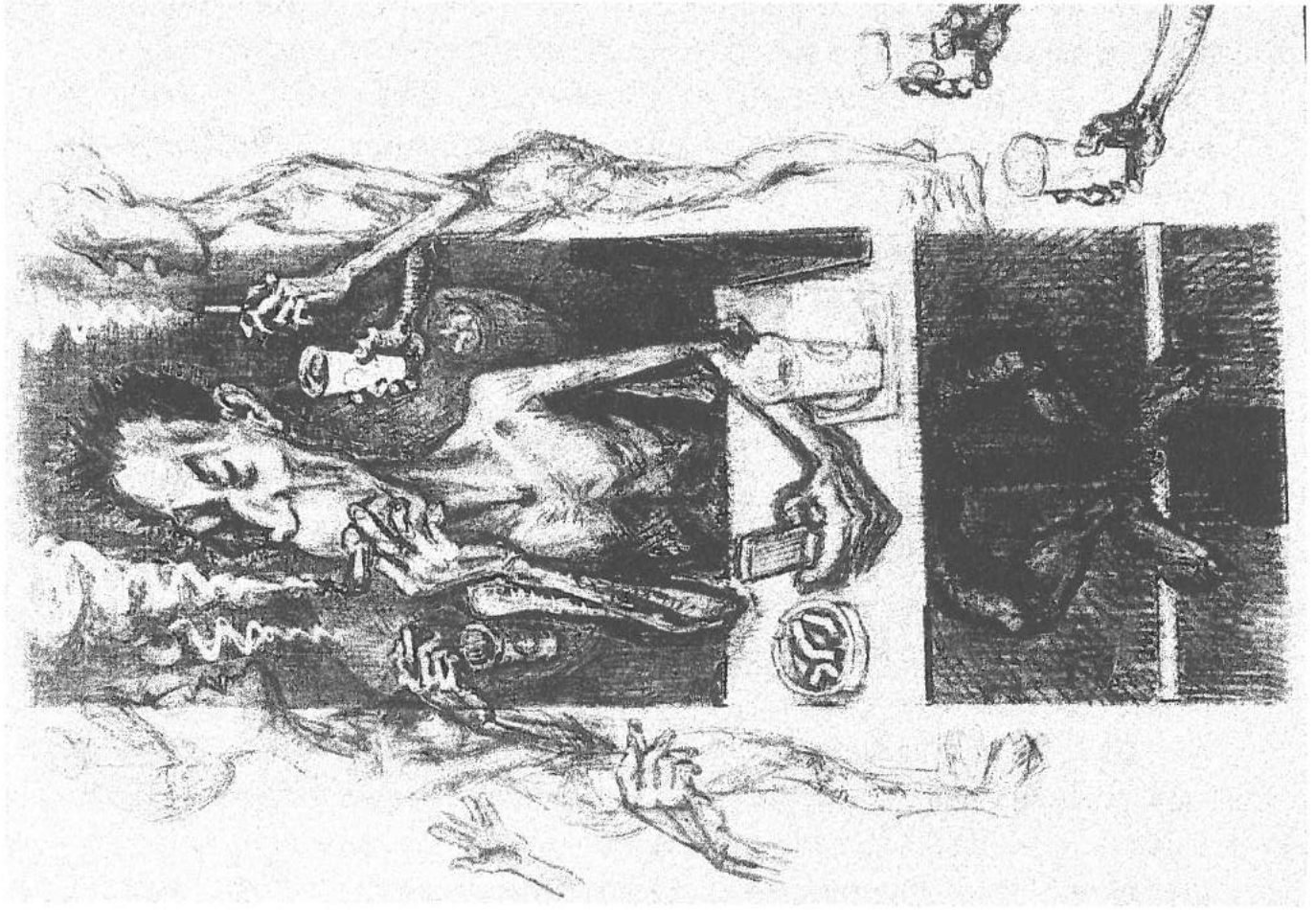
時代が『変化』し、状況や人々の意識が変わったならば、それに応じてやり方や仕組みそのものを変えていかなければ、取り残されるのは当たり前なのかもしれない。もちろん、どう変えるかが問題で、物事には換骨奪胎とにならないよう変えてはいけない根幹もあるだろうし、時代に関わらず「変わらない良さがある」という言い方も場合によっては可能なのだろうと思う。。そこはジレンマだ。いかに伝統や個性を残しつつ時代変化に適応しうるのか？

汎美の場合も、先ほどの「SNS」対応の他にも運営を円滑かつ持続可能にするために色々と改革の途上だが、変えてはならない根幹は、「自由な創作と発表の場」という特性であり、それを担保する民主的手続きおよび平等性だろうと思う。もし、これが減ってしまうようでは、果たして「汎美」と言えるのだろうか？と懸念する。だから、小さなサイズの作品が増えることが美術館の展示空間の充実という観点で問題となり、出品規定に下限を設けることになった経緯は、仕方ない事とはいえ、より重要なのは、「自由な発表の場という大前提を守りつつ、いかに質の高い“多様な”作品を集めることができるか？」という事であり、今後の課題だと思う。

さらには、美術館での「公募団体展」という形式が、既に狭い領域であるという認識に立てば、むしろその外で起こっている様々な事象を意識し、公募展一般の既定路線からの脱却を目指す方向で工夫を凝らしたほうが、より汎美らしいのではないかととも思う。

このように SNS の話題から始まり、一筋縄にはいかない『変化』（への対応）という事について考えを巡らせていると、分子生物学者の福岡伸一さんの著作「動的平衡」で語られている次のような内容を連想した。すなわち“細胞は、一見『変化』が無いように見えて実は分子レベルで常に入れ替わりつつ全体の恒常性を保っている。”という事。これを広く解釈して「変化（劣化）しないためには変化（変革）し続けなければならない」といふように言い替えれば、わりと一般的事象にも当てはまるような気がする。汎美も、自身の創作活動においても、弛まぬ『変化』の意志を持ち続け、試行錯誤を続けるより他はない。





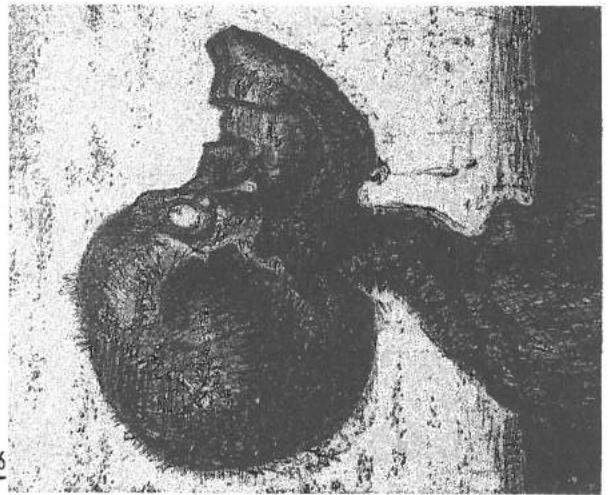
自画像

日和佐の世界

茜が送ってきた
ソネット(十四
行詩)を添付し
ます。 編集子

「人間芝居によせて」

真の悲劇といふものは
喜劇を呑んで育ちます
専売公社のさらりひまん
煙草嫌ひの奴らには
煙草の烟をふれせんと
焼き場の烟よりけむたかる
燻^{くゆ}らせたまへ くゆらせよ
骨の髓まで燻らせよ



専売公社のさらりひまん
骨髓に沁む孤独から
染み出る紅きひとすじの
凍る泪のその重さ
喜劇を筐^はに詰めたなら
かたり・ことりと骨唄ふ

茜

私は一般出品の最中、作家の方々が自由に、しかし真摯に自分の作品へ追究している姿が作品を通じて感じられていました。例えば、油絵でも、同じ傾向の絵はあまり見受けられません。いわゆる～派だとか、そういった派閥ではなく、「この人の絵」という個性として観れます。立体作品にしてもそうでしょう。私は枠組みは勝手に自分で決めてやりたいもので、更に気づいたらその枠もバッキバキに壊すこともあれば丁寧に枠をつくってやったりするもののような気がします。枠に名をつけるなんて野暮なことはなかなかしたくないものです。

これが である。この空白に色んなものを詰め込んであるのが、汎美という会の面白いところです。この様々な色の可能性のある空白に私が何を詰められるか。わくわくしてきます。私が汎美に入った理由の一つです。

もう一つは汎美展に出展している方々がまた面白い。皆さん、ホントに面白い歳の取り方をなさっているなと感じてしまいます。若輩者が何をと私が自分に対して勝手に思ってしまうんですが、皆さん、偉そう、という印象が余りないのです。一人一人に興味を持ち、なお、吸収しようとしている方もいれば、吸収せずともこの視点からどう見ると、様々なベクトルの芯が観られる感覚がします。歳をとれば偉そうになっていくという、学生の頃の御年配の方への偏見がまた生まれることはほとんど無かったように思います。

私は臆病な性格なもので、怖いものは知りたくありません。人は殊更に怖い。故に知りたい。有難いことに、この会員の方々は私に興味を抱いてくださっている。同じ座高の椅子に座ろうとし、話してくださる方々がいらっしゃいました。私だけでなく、一人一人にそういった姿勢でいようとしているような印象を受けました。

私の絵は自分の経験が反映することが多々あります。私の精神病もどきの所為もありましょうが。故に、汎美のような多種多様な人と話せること、その人の絵を観れることが私にとっても糧となります。もしよろしければ私に様々な話をしてください。あるいは話を聞いてやってください。私も感じたままを引っ張って、下手をすると、皆さんの糧になる話をできるかもわかりません。できたらいいなあ。

これから会員になるにあたり私はそういった汎美展の持つ自由かつ真摯な姿勢を受け自分の作品にどう向けて行くかを考えています。

例えば油絵のタッチを変える。あるいは水彩、マンガ等、違うジャンルの絵画を試してみる、さらに絵に限らず、様々なジャンルの芸術作品をチャレンジしてみるなど、あらゆるところに手を出して行きたいと考えています。その中で自分の気持ちの良い、あるいは気持ち悪くも気持ちの良い「芯」を見つけていけたらなど。

汎美展に何を貢献できるかは入りたての私にはまだ分かりません。面白い方を見つけたら招待したりだとか、係のお手伝いくらいしか思いつきません、

病気もどきもあつたりとデメリットも持っていますが、できうる限りになってしまいますが、努めさせていただきます。

「己は無し、すなわち己は空の^{こみち}徑にあり」という勝手な問いを持ちつつ、己の絵に向かい合い、これから会員として汎美に参加し、様々な作家さんから良いところ取りをしていきたいと思っております。また、まだまだ拙い私ではありますが、私からも皆さんに良いところ取りをしていただけるように精進いたします。

註解：「空」は一般に言う「そら」「から」の意ではなく、この場合の「空(くう)」は「固定的なものでは無く、在ると思えば無く、無いと思えば実在するもの」

を言います。インド哲学の根本思想。実体は理解するものよりは感受するもの、と理解の上に感覚を位置づけています。そう言えば、「0」はインドの発見、またピカソには次の言葉があります。

「皆さんは何故私の絵を理解しようとなさるか、ただ感じて好きになってもらえば良いのです。」—パブロ・ピカソ

編集子

デッサンの線



新海 進

デッサンを始めて数年たち、「だいぶよくなったが線に味がないんだよな」と言われた。舐めてみた。味は無かった。

以来「味のある線」を捜して紙とペンをもちウロウロしている。

上手くいかない。紙が悪い、ペンのせいだ、とか言訳をしながら。

これだと思ふ線に出逢い、まねてみると僅かに味が出たが自分の味付けではない。

辛かったり、甘かったり、だ。

「一本の線で面を表現することもできるんだよ。」と言われたこともある。線を引いてみた。分からない。もう一本引いてみた。ますます分からない。どんどん引いてみた。全く分からない。分からないまま今になった。



人体デッサンを共に学んでいた大先輩がボソッとやったことがある。

「自分の納得のいく線で納得のいくデッサンが1枚でも描けるまで俺は続けるよ」何年も経ちその先輩の言葉が少し分かったような気がする。

ガンで闘病中のその先輩は今もベッドの上で小さなスケッチブックに線を引き続けているらしい。



汎美協会へ、今日の芸術家たちへ、

小泉 恵一

芸術は、つねに新しく創造されなければならない。けっして模倣であってはならないことは言うまでもありません。他人の作ったものはもちろん、自分自身がすでにつくりあげたものを、再びくりかえすということさえも芸術の本質ではないのです。このように、独自に尖端的な課題をつくりあげて前進してゆく芸術家はアヴァンギャルド(前衛)です。これにたいして、それを上手にこなしてより安易な型とし、一般に実用化させるのはモダニズム(近代主義)です。したがって、双方の作品は一見似かよっているのですが、内容的にはまったく正反対の要素をもっているのです。

岡本太郎 著 “今日の芸術” 昭和9年8月5日初版発行 第84項より抜粋。

以下本文

芸術表現に無限の自由を実現させるとは、譬えて言うならば、地上で生きることにもっとも適した人体を無重力空間に放り出して宇宙遊泳をさせるようなものである。もし、人に何の目的もなく、不用意にそんな事をさせれば、何の成果もあげられずに、その人の生涯を終わらせる事になるだろう。若者は自己の内面を掘り下げるだけの抽象美術に飽きた。いつまでも夢想し続けることはできない。確かに、純粋な抽象を描く事は、心を完全な遊びの領域まで高めてくれる物である。遊びとは、行き詰った時代に、或は、最も裕福になった時に、人間が本当にすべき事でもある。しかし、最期までひとつの遊びに留まり続けようとするなら、その作品の本質は自己愛でしかなく、芸術と芸術家とを病んだナルシズムに墮としかねない。具象美術もまた然り。美術に理念など無くとも良い、言葉で説明する必要はない、ただ大きな物を作れば良い、という主張は、資本主義社会が栄華を極めた時代のエポックであったが、時代は変わった。日本人社会の最盛期は、過ぎ去った。皆が高度な専門職に就けるのではない。収入の格差が明確となり、貧困は増大し続ける。みずからの行動理念を、みずからの言葉で説明し、みずからを規定する事のできない者は、プロフェッショナルとは認められないし、今日、独立して活動している作家の中にそんな人はいない。他者に対するにせよ、自己に対するにせよ、批判は結果的に建設的であった時のみ、正しいと言える。批判をする者は、その批判対象の全体的な行程に参加し、改善する責任を負う者でなければならない。何時も我々が必要とし、心から欲していることは、嘘偽りのない情報の開示であり、信頼を基礎にした社会の再建である。一方で、最先端の作家達の活動と言え、個人的職業能力の進歩を基本としている。一見、作品は過去の事例と同様に見えても、全く新しい技術体系を開発し続けている。プロフェッショナルを自任する作家ならば、自身の専門分野とは異なった分野の人々と連携して、芸術家としての役割を社会の中で明確にしなければならない。現役で働いている世代には、年齢や職業ごとに分断された日本人社会を再編成する事が求められており、事実、字義どおりの真の前衛芸術家達は、常にその事を自覚しているのである。私は本年から汎美術協会の会員となった。なぜなら、汎美術協会の基本理念は、それを実現する可能性を秘めているのだから。

2017「汎美・秋季展」に想う

保倉 一郎

今年も汎美・秋季展は立派に飾り付けを終え、皆さんとの交流も良好に行われ、開場を待つばかりの絵の前に立ってしみじみと想いに耽りました。

.....

幾度も死線を越えて、老いた身は死の恐怖や不安を全く意識しなくなりました。苦痛は薬で避けてゆけるはずです。

先を知らずに平常心でいられ、過去の想いのなかに生きている自分が不思議だとも感じますが、疑問にも悔いにも悩まなくなりました。老境の呆然としたような不明瞭な意志は、誠に思いがけない実際です。



秋季展へ向けて

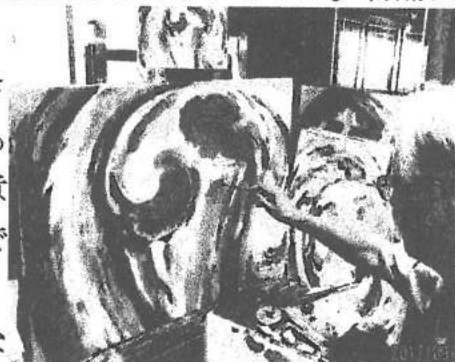
でも描く絵は、温和で静かな心境でいながら嘗てない激しさ

と鮮明な色彩・強い感情に満ちた情緒のイメージになります。

情緒・慈愛・安堵のうちに命の喜びと愛情を求め続ける。

美と快樂は煩惱の中に占める情愛や求愛で、人格と精神の心

に根差す思想の深さでしょう。表現派の流れを踏む、内攻的で優しく綺麗な情緒を含む絵が描きたい。だから自然と興味の趣く絵ではゴッホやムンクが好きです。自分の心理分析は不確かなもので解りません。ゴッホとムンクをごっちゃにしたような気持ちと、清純だが強い情愛を探る矛盾した意識が画面に展開します。そんな力や思いは、以前にも今にも引き出せないのに？…障害者になっても心は健康なままの側面が残っているのかと不思議な心境です。



アトリエで制作中



ムンク

文学小説では大江健三郎が好きです。藤村の詩や物語はなおさらですが、三浦哲夫の「忍ぶ川」は私の愛読書で、純情で凡庸な目標と表現が身近な親しみをもたらすので、この小説が大好きだ。私の絵の心と共通しているように感じています。

80歳を過ぎてなを迷う無知な私に、皆様がアドバイス下さるよう期待いたします。

2017年10月19日

燃えあがる情念

佐川 毅彦

私は絶えずなにかを描こうとしています。絵を描くこと以外はどうでもいいのですが、当然の事ですが人生においてやらなければならない事が沢山あります。適当にあしらっていたら更にワケわからん面倒ごとがわきあがり、私を苦しめる。まったく不愉快な情態の



中でひたすら絵画への情熱を燃やし続けているのです。絵で表現したいのは沢山あります。植物、花、家、風景…でもやはり女性のいろんな表情を描きたい。筆以外の物で色を塗ることもあります。木の枝とか、まるめた紙とか、布でこすったりとか、またスプレーを使うといい表現が出来るとおもうけど、粒子が部屋の中で飛ぶので使わん。いろいろ描く事で「何か」を追究しているのです。

科学者が試行錯誤しながら何度も実験を繰り返すように、あるいは金を求める錬金術師のようにメチャクチャな模索をして「ナニカ」を求めています。そしてたまに、すごく気に入った作品ができますけど、もう一枚そんな感じの絵を描けといわれてもできません。私は職人じゃない、絵描きだ。



大学をやめてデザイン会社に勤めてが、通勤の井の頭線の車内の中吊りにがっていた。そのコピーに「バックスリロ展」とある。私はその文章がすごで私は酒飲みになった。



いたのです「ユトリロ展」の広告が下とミューズの出会い・ユトリロく気に入った。そのおかげ

その後、身体をこわしてしまい、今す…出来るだけ。

は飲まないようにしています

今思う事は子供の頃、あるいは高校生あたりにただひたすら自分の思うまま、のびのびと好き勝手に絵を描いていました…はずだと思ふ。あの時のように絵が描けたら私は最高に幸せである。

汎美術協会との出会いと抱負

東京・小平市 岸 明子

西東京市の公民館で原田博介先生のもとに十数人が集い楽しみながら自由に絵を描いてきました。吉田さん馬場さん達の作品発表の「日曜会展」を毎年鑑賞させていただき、私達の「サタデー展」にもおいでいただくという交流がありました。吉田敦彦著「デッサンのすすめ」「抽象絵画のすすめ」を購読しました。在職中は教職員展に毎年出品していましたが退職が近づいた時、汎美展を紹介され比留間倉子さんと出品するようになりました。吉田さんは上下関係や権威的なものを嫌い自由に対等に表現活動ができるように戦ってくださいました。汎美展の高い理想を掲げているところに共感し出品を続けています。展示の広さが一人5mも保証され、今までより大きい作品に取り組むようになりました。会員の皆さんの自由で個性豊かな作品に影響を受け抽象絵画の楽しさや自由さが自分の中に育ってきたように思います。

秋季展、春季展と繰り返しているうちに、気がついたらシルバー会員になっていました。サタデー絵の会は、原田先生が亡くなられたあとも、夜に公民館に集い人物画、静物画を個性豊かに描き合評しながら前進しています。西東京市美術協会展にはそれぞれテーマを

決めて大きい作品を描き出品しています。市の美術協会の方々からはサタデーの人の絵は独創的でおもしろいと評価をいただいています。

次の汎美展の作品のテーマは何にしようかとこれがなかなか大変です。キャンパスにむかい手を動かし、偶然に出来たすばらしいものを見逃さないようにと指導を受けた事を思い出して描きすぎてこわしてしまわないように気をつけて描きすすめます。

偶然以上のものはないと教えられましたが、なかなかつかめません。

テーマを決めずに形や色で遊びながら自分らしい作品ができたらどんなに嬉しいでしょう。自分らしい作品となると自分のよく使う色彩や心の中から現われる形の構成が他とは違うことでしょうか。十人で同じ物を描いても作品を並べて合評をすると十通りの作品ができます。そこに集まって描く楽しさ・苦しさがああります。

「汎美は審査のない理想的な公募展です。全く対等な立場で作品を発表し、交流し、切磋琢磨するための場を作り出す・・・ということです。」吉田敦彦氏が最期に残されたメッセージをしっかりと受け止め キャンパスの上の自由な空間で絵を描ける幸せを味わいたいと思います。



よんぶんのさん
「 3 / 4 」

根岸 節

私は以前「自然に親しむ会」の企画で、日高町にある巾着田を訪れたことがありました。その日高町のはずれが私の生まれたところです。一風変わった父とごく平凡な母との間に、14年に兄が、16年に私が生まれました。その後家族4人、狭山市入間川に移り住みました。

弟が18年に生まれ、2ヶ月後に父は赤紙1枚で中国に送られ、シベリヤに送られ、大変厳しい生活を送りました。

私が小学校に入学する頃に父が帰ってきました。自作の湯飲み茶碗とスプーン、お土産に赤い林檎1つを手に帰宅しました。こわそうで近寄れませんでした。

私の小学校生活。弟が2人生まれ、いつも弟たちの子守をしながら遊びました。近くの小川で魚取り、カエル取り、夏の夜にはホタル取り、秋には稲穂につかまっているイナゴ取りなど、自然の中でいろいろと過ごしました。

小学校での想いでの一つ、ジョンソン基地が近くにありましたのでアメリカとの関わりがいろいろありました。全校生徒か？学年か？忘れましたが、その米軍基地でクリスマスに招待されたり etc. 学校で賛美歌を練習し、そして基地の中へ空から飛行機が滑走してきて中からサンタクロースが現れました。基地の中ではアメリカの子供達が、馬小屋でのキリスト誕生の劇を見せてくれました。トイレにはビックリ、洋式は見るのが初めて。私達は解らず大変でした。

私は戦争の体験の記憶はあまり無く、当時アメリカの国やアメリカ人に対しては“すごいなー”とっていました。

中学校に入るといろいろな先生に教わることになります。変わった先生が一人、画家として食べていけないから教師になったという畑本先生です。その先生が私の絵を気に入ってくれましたので、美術だけは良い成績でした。

高校に入学するとすぐ美術部に入り油絵の道具を手に入れました。家の周りは自然が一杯。入間川が流れ、遠くにはくっきりと秩父連山が見え、美しい風景が一杯だからいっぱい描きました。近くにガシャガシャ山というへんてこな林があって、そこもよく描きました。時間さえあればいつも描いていたような気がします。

高校3年の夏、美術の高橋先生が私の父に「この子は美大に入れた方がいいですよ」と。父はその時「私は絵が好きで絵描きになりたかったが貧しかったので出来なかった」と美大入学時、私の為に入学手続きに学校まで一緒に来てくれました。こわい父でしたが、父との間が少し近づいたような気がしました。

美大卒業後、職に就かず結婚。そして長男が生まれました。夫は公立の高校教師で当時は安い給料での生活、実家から少しの援助を受けていたのですが、これではまずいと思い、27才の時、教師という仕事に就きました。図工の教師は絵描きが多く、それに触発され私も描き始めました。

住まいは東村山久米川商店街裏の公営住宅でした。前の店が「山尾金物店」、奥さんが変わった人で二階がギャラリーに、そこでデッサン会が誕生しました。中心が吉田敦彦さん、個性的な人達が多く集まり、参加するのが大変楽しみでした。油絵も公募展に出品し、100号、時々150号、夜も制作し、土曜日曜も制作し、12月31日も制作していてあきれられた状態でした。当時を振り返ると頭の中は絵の制作でいっぱいな時期でした。

ある日、小学3年の長男がゼーゼー、喘息です。子供のことを放っておいたので自業自得です。長男と私は狭山の実家へ、夫と長女は東村山で4年間過ごしました。長男が元気になり、家族4人現在の東所沢に移りました。

30才から続けている公募展ではなかなか会員にはなれません。会員になる力がないのです。会員の方に「もっと目立つように描け」と言われ、どうしていいか解らなくなっていました。その時吉田敦彦さんから汎美に誘われました。

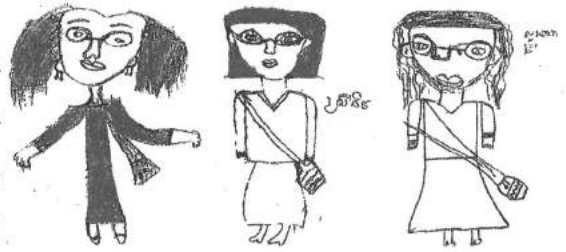
汎美代表の境さん「汎美は現代美術を追究している団体です」とのこと、現代美術とは何か？…私が絵の事をいろいろ考え始めたのは汎美に入ってからです。

※文末の註参照

またカンボジアのアンコールワットが見たい為に、シャンティ国際ボランティア会(SVA)に入りました。タイのスラム、内戦後のカンボジア、山岳民族の「モン」等、インドシナ半島の事情を少しずつ知る事になりました。貧しさは大変なものです。カンボジアでは裸足でボロボロの洋服を着た子供が多く、しかし目は美しく輝いていました。訪問する時、絵本(日本の絵本にその国の訳を貼ったもの)、画用紙、エンピツなど持って行

き、子供達と交流しました。

ある時、子供が棒で地面に絵を描いていました。地面はほこりっぽい赤土で立体的に見えすてきてました。感動しました。私はこの時、描くのは何でもいいのだとカンボジアの子供から教わった様な気がします。そしてキャンバスに描くのは止めました。



カンボジア児童の「ネギセンセ ジャボン」

汎美は何を描いたらいいか教えてくれませんが、私は考えました。とりあえず「形と空間を描こう」という事で続けていますが、なかなかうまくいきません。

「アートイ展」にも誘われ、創る楽しさを味わいました。夜、糸鋸で何日も何日もガタガタと動かしていました。作品は出来上がり、私なりに満足できました。気が付いた時、右手の親指が動かなくなっていました。昨年2度の手術で動く様になりましたが、右手の親指、人差し指、中指に力が入りません。現在リハビリ中ですが、ペンをにぎったり絵筆をにぎったりはできます。まあこの歳ですからいいかと思えます。

人生100才という時代、私は3/4の人生が終わりました。特徴のない人生ですが、平和な人生だったと思えます。後まだ1/4有ります。汎美で描く事、物を創る事、そしてインドシナの子供達と遊ぶ事、これらを続けて行けたらいいなと思っています。

※シャンティ=サンスクリット語で「平和」の意。

生い立ちを想う

保倉 一郎

82歳を顧みて、今ある自分を不思議に感じる。朝に目覚めて「まだ、ここに生きている、どうなるんだろう？」

今のことも不思議に思うのだから、先のことが分かるわけが無い。それでも次期・汎美展の制作を進めている。我ながら変な男だと思う、「汎美便り」を書こうと思いパソコンにも向かい…。



制作中の私

幼少の頃の思い出から書き始めよう。

生まれながらに、首に臍の緒が巻き付き、産声を上げず15分以上もそのままいたそうで、こうした赤子は99.8パーセント脳に重い障害を持ってしまうそうだ。だが奇跡的に育ち、健康優良児で過ごして来たそうです。

戦時の少年期、
ち、日本軍の毎
聞き、飛行機少
戦を迎えた。



近くの中島飛行機の練習機が頭上を飛ぶのを見て育日の航空機攻撃の輝かしい戦果をラジオニュースに年の空への夢を広げていた。後日それが逆になり敗

それでも桐生高等工業専門学校で飛行機的设计技術を学び、中島飛行機の技師になりたかった夢は消えず、今でも空飛ぶ鳥の姿にまで空を憧れます。

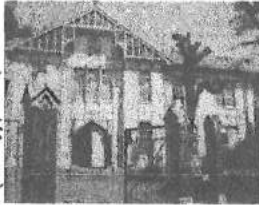
19の歳、受験して地元の群馬大学工学部に学んだ。私にとっては子供の時からの憧れ

で思い出の多い学校でした。群馬大学理工学部の前身である桐生工業中学校と桐生高等工業学校は西田校長により創立された。



傑物西田校長

西田博太郎校長は薩摩藩の出身で、西郷隆盛と同郷。大東亜戦争の日本陸軍の力を見ぬいていたから、我が校に来る者はよほど馬鹿でないかぎり入れてやると公言し、校内にあふれるほどの学生を置き、兵役や徴用を逃れさせた。大酒を飲んで酔うと、正門脇にあった交番へ行き巡査めがけて小便をかけ、「我が輩は勲二等だ、勅令を貰って来てから文句を言え！」と威張った



わが学舎

のは有名なことで、長を呼んで「オレを丸めて短刀と共込んでいた。これの会計課長が私の

当時各学校に必ずあった奉安殿を造る金を、会計課と二人で飲んじまおう」と言って御真影と教育勅語にロッカーに納め、ばれたら切腹すれば良いと決めだけは関係者でも滅多には知らずにいたらしい。この叔父だったので、彼が戦後病気で死ぬ直前に私に話して行った。

もう一つの思い出は、戦時と敗戦で同年代の者には忘れ得ない強い記憶です。

東条英機・ヒットラー・スターリンの存在は 80 年前のことではかない。ヒットラー・スターリンのファシズムは恐ろしかったが、東条英機のそれは更に恐ろしく、その驚きと愚かさに呆れる。東条英機の恐ろしい信念と真実をもっと考えるべきだ。



東京裁判の東条

「死して捕虜の恥をさらすべからず！」この一語で計り知れない青年達が戦場に散った。その多くは戦わずに海の藻屑と消え、ジャングルにさまよい餓死した。



ヒットラー

それはともかく本土が焼夷弾で焼かれる中で部下に命じて東京の土地を買い占め、



して靖国彼は切腹も出来ず、ピストルで腹の皮を摘まみ上げて横打ちし、負傷者として

東条自裁未遂

土地神話を見越して東上会館を作って大儲けした野郎が軍神と神社に祭られ、毎度閣僚達が参拝する様はあきれるばかりだ。MP に捉えられ、東京裁判では最後まで無罪を主張した。なんとも見下げ果てた野郎だ。

ときの陸軍士官学校では主席になれず、主席は蒋介石だったのは誰もが知るところだ。馬鹿が利巧に勝てるわけがない。ポツダム宣言を作るとき、蒋介石は日本領土を4分割することに反対し、日本を救ってくれた恩は重大だ。北京の人民解放歴史館に彼の写真と功績が大きく展示してある。



ポツダム会談 1945年



トラップを降りるマッカーサー

旅行好きな私は早くからアメリカをはじめ、中国、東南アジア諸国、地中海と北のヨーロッパ諸国の有名な美術館の在る都市を尋ね廻った。そして6年前に脳梗塞で半身不随になるまで続いた。

日本の歴史は、外来の人物や集団が占めた政治家が意外と多く、支配者が外来者である。百済人の大和朝廷の天皇から、藤原一族による平安時代の支配。太平洋戦争の敗戦によるGHQ を通しての米国軍人マッカーサーの治めた日本の史上希に見る現実があるのは特筆

すべき史実でしょう。縄文以前はともかく、鎌倉幕府の成立が、日本人による日本人の為の政治で、世界的にもこの11世紀ごろが世界の多くの国の建設が成立したようです。歴史は偶然の連続で驚くことでは無いのですが、マッカーサーが残した政治の功績は驚くべき見事なことで、世界史の中でも特別に注目されるべき驚きではないでしょうか？

農地改革による農地解放と戦争放棄を謳った偉大な行政改革はスイスの永久中立宣言と並んで世界に先じた理想の姿勢だ。農地開放が無血に成立して産業革命を得たことを当事者の小作農だった人達があまり意識しないのは不思議としか思えないと、ある西洋暦学専門の学者が言っていた。

私達は歴史に無関心だから、今の日本と中国の現代を偉大な東洋の転換となし、グローバル化の胎動を成している事実を慎重に意識し、偶然とは言え、先駆者になっている誇りと責任を痛感しなければならないでしょう。人々の未来をこの現実から生み出して行かなければならないのですから。

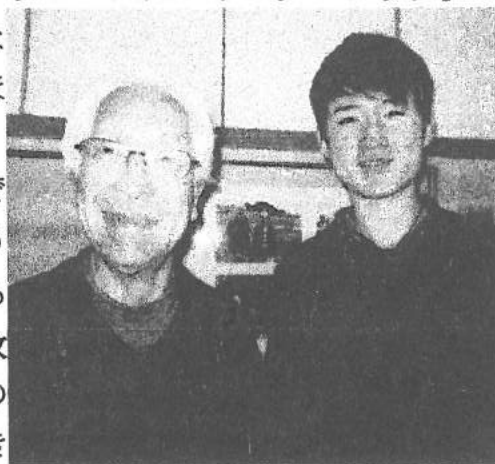
グローバル社会は交流・交信・交通、経済も生産・流通・消費・金融が世界の一体化を基礎づかっていて、その面では国家・国境は溶け合っているようです。帝国主義、国家主義の遺物をどのように取り除いて行くか、各国の政治の責任でなんとしても成し遂げなければならないことです。

北朝鮮やトランプ氏の存在も困ったものとはいえ、両者とも後方ではグローバル化に押され、朝鮮は中国・ロシアの経済国境が崩れ、米国とメキシコのそれも金網を潜り抜けて通勤している勤労者が多く、現実にはグローバル化が進んでいることは誰でも知っています。政治家・政治屋・武器商人をどう変えて行くかです。平和裏に平穏な未来を望みます。



孫、早大入学

早大の高等学院から政経学部1年生に進んだ孫が、学校の推薦をうけてアメリカ・カリフォルニア州の大学へ留学することになり喜んでいますが。彼は中学のときから憧れていた「グローバル・リーダーシップ」の養成についての勉強に行けることになったからです。背も伸びて見上げるほどです。



「ああ、若いなあ、孫は」(爺)

世界はすでにグローバル化へ進み始めているそうですね。私が果たせなかった夢を孫が成してくれるよう国家主義が消えて、国境が経済行政区に替わり交流も楽になれば大きな革命になるでしょう。日本の農地改革と戦争放棄は、スイスの永世中立と共にその好例の一つですから。農地改革・財閥追放は市民開放の大きな功績だと教えてくれた栃川一郎氏が思い出されます。


今の暮らしが静かで平穏な日々を続けてくれることを強く望みます。

2018年2月3日




乃木坂に娘等^{たじろ}屯する脚下の
 甕^{いし}のはざまにはる来にけらし

寒木瓜や 枯色に添へし 紅一点



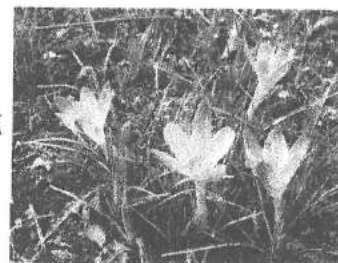
四十雀の群れが
 枯れ色の藪を
 慌ただしく飛び過ぎた
 刻を惜しむやうに
 春の光を待ら焦がれるやうに
 私は何も
 刻の流れる韻を聴いた

愚 聴風




スノードロップ (待雪草)

11月末から1月一杯咲き続け、2月に入るとボタニカル・クロッカスに花のバトンを手渡す。



ボタニカル・クロッカス

編集後記

皆様のご協力で「39号」やっと出来ました。それぞれにキャラクターが出て楽しく、内容も濃いものになりました。原稿依頼をはじめ種々のお仕事を三竹さんにお世話頂き、小林(勢津子)さんの進んでのご協力に、また原稿お寄せ頂いた方々を含め御礼申し上げます。

例年の通り汎美展が春を連れて参りました。この春光に会員の皆様の耀うお姿を想うこの頃です。

編集子

2018年3月

発行 〒143-0023

大田区山王 1-44-11・701

中西方

汎美術協会事務局